

一望岳山荘にて— 古市幸利先生の思い出

(2009年2月1日)  
〈登行名 小林早苗〉

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄 (松本市出身)

1月19日付け『市民タイムス』によると、1月27日から30日までの四日間、故・古市幸利氏の回顧展が松本市美術館で開催されるという。紙面の第一面に「信州の山 愛した軌跡」「ポスターに見る画業」と見出しがついていた。古市先生が油絵を描いている写真や長女の美術教諭・小林早苗さんが紹介しているポスターのカラー写真を見て、私はとても嬉しかった。ぜひ回顧展を観たいのだけれど、日程的にそれが適わぬので、この機会に古市先生の思い出話を語らせていただく。

信州の山や風景をあれほど愛し、松本平の隅々まで歩かれて実に多くの美しい作品を残されているのに、作品を収集し顕彰する郷里の画家のなかには古市先生のお名前がなかったように思われ、それを残念に感じていたからでもある。

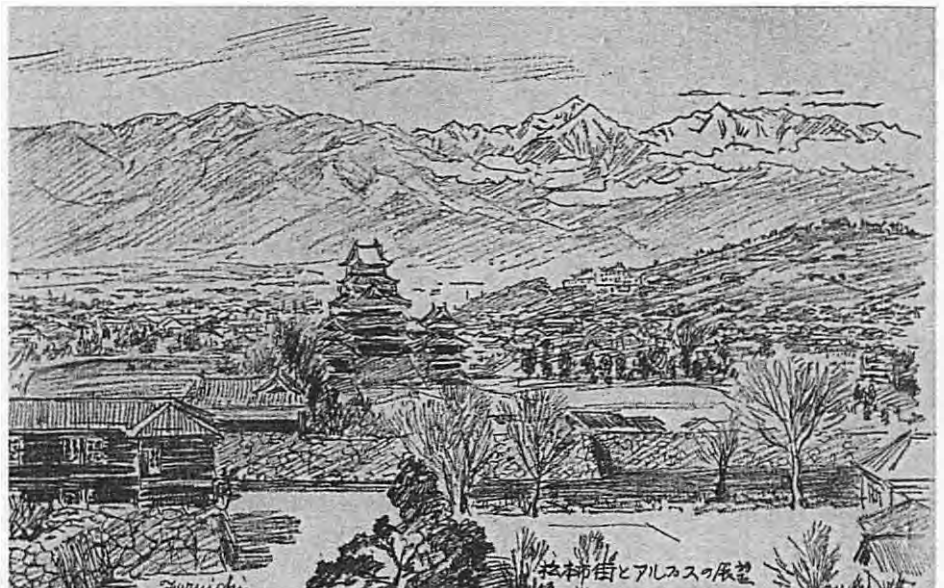
私が古市先生に絵を習い始めたのは、確か昭和23(1948)年の秋、源池小学校6年生のときであった。たまたまわが家(薬局)に立ち寄られた古市先生に、学校の宿題で描いた私の水彩画を見ていただいた。それは薄川にかかる逢初橋と白銀の北アルプスを描いた絵であったが、色調が良いと褒めていただき、以来古市先生に絵を習うことになった。清水中学校二年生のときには、「夜の書棚」と題する二十号の水彩画を中信美術展に出品して入選し、会場を回っておられた大御所・石井柏亭先生にご紹介いただき、柏亭先生からお言葉を頂戴するという光栄にも預かった。当時、清水中学校同級生の降旗俊明君も古市先生に習っていて、私たちはその後、長野県展にも入選した。やがて医師になった俊明君は油絵、私は水彩画なので水彩画界の大家・白山卓吉先生にも指導を受けたが、一緒に古市先生に連れられて蓮華の花咲き乱れる安曇野の田園風景を描いたこともあった。

古市先生は四国の香川県が故郷で、わが家はそこの港を描いた作品も槍ヶ岳の絵や静物画、スケッチなどとともに残っているが、先生は小柄な体躯に鼻眼鏡で飄々とあちこちに出歩いては絵を描かれていた。その当時、絵筆一本で生活を支えるのは並大抵のことではなく、かなり多作であったのも生活の糧としての画業であったと思う。寒い日に出かけられたあと、ちびりちびりと飲まれたお酒がお好きであった。

古市先生は一水会や日展に出品されていたことに示されるように、一貫して忠実な写実主義であった。当時は信州画壇にも国画会や春陽会さらには二科会などの影響が強くなり、美術アカデミズムや画壇ポリティックスからも遠い存在であった古市先生は、時には孤立無援であられたが、気の合った山岳画家の仲間と展覧会を開いたり、これも生活のためであったろう、私の望岳山荘にも張ってある美ヶ原のポスターなどの観光ポスターや絵葉書の制作にも精を出されていた。この点ではロートレックにも似ている。

先生から頂く手造りの年賀状も美しく楽しいものであったが、私自身の多忙もあって数年間は音信が途絶えたままになってしまっていた。いつか望岳山荘に来ていただいて、ヴェランダから北アルプスを描いていただきたいと思っていたのに、それが叶わぬことになったと伺って残念に思っていた矢先に、今回の回顧展開催を知った次第である。

平成17年1月29日  
「市民タイムス」掲載



松本市街とアルプスの展望

絵はがきスケッチ「松本市街とアルプスの展望」



1947.2.21 自画像スケッチ